

ノーチラス号から
観察する❖



原書挿絵

「法務部の水準は高
なことを書くと袋叩
浮上できなくなる危
ります。

ブリッシング)を参

13

法務部組織論と法律意見書の機能

第12話：太平洋編Ⅲ 太平洋戦争 ——「失敗の本質」

1945年8月8日（ハワイ時間）、パール・ハーバーにて

「シ◆ト！ ジャップの野郎、ひでえことしやがったな！」

「おいおい君、少将の前で汚い言葉は使うなよ。部下が失礼しました」

「いや、私も彼と全く同感だから気にするな」

その若い将官は鷹揚に言って、沈没したまま油を流し続ける戦艦アリゾナの様子をポートからじっと見ていた。1941年12月7日（日本時間8日）の朝、ハワイオアフ島真珠湾の米太平洋艦隊は大日本帝国海軍（連合艦隊）機動部隊の奇襲を受け、他の戦艦同様、アリゾナもまともな戦闘もできないまま1,177人の将兵とともに沈んだ。船体はもちろん、遺体の多くが引き揚げられていない。

「そうだ、私は合衆国太平洋艦隊の少将。その使命はニミッツ提督に従って日本海軍に勝利しこの英雄たちの無念を晴らし、一刻も早くこの太平洋に平和を取り戻すことだ。あれから我々はミッドウエーの決戦で日本海軍空母4隻すべてを撃沈することに成功し制空権を握った。ただその時、私が指揮をとっていた空母『ヨークタウン』は『ヒリュウ』からの艦載機による第二次猛攻と魚雷二本を受け航行不能となり、総員退避を命じた。私自身もその際死線をさまよう重傷を得て遂にここに戻るまでサンフランシスコの病院で再起のためのリハビリを余儀なくされたのだった…。その間我が軍はレイテ沖で戦艦ムサシを、オキナワ沖では日本の誇るヤマトを撃沈した。オキナワは占領済みであり、トーキョーを含む日本の主要都市はB-29による爆撃で疲弊、アトミック・ボムでヒロシマは壊滅し、ソ連は対日宣戦布告をした。私もこれから日本本土上陸を期す『ブラックリスト作戦』に参加する。日本国民を『各地で皇軍大勝利』などと騙し続け、頑迷に降伏を拒んできた軍国主義者たちも決断するはずだ。私は再び祖国に貢献できることを誇りに思う…。ただ、この一抹の違和感は何だろう。まだ見ぬ国、日本。そして…ナガサキ。そこはどのような町なのだろう

う。美しい町、古くから外国に開かれた港町と聞くが」

そこに急報を告げるボートがやってきて、部下のジロー少尉が大声で叫んだ。

「ピンカートン少将！ 只今緊急の連絡が入りました。日本現地時間9日午前11時2分、プルトニウム型アトミック・ボムが落とされたそうです！ Nagasakiは一瞬で瓦礫と化した模様です」

「えっ？ アトミック・ボム？ ジロー、どこに落ちたと言った!?」

「サー、ナガサキ！」

「ナガサキに!? ヒロシマで終わりではなかったのか!？」



「失敗の本質」——日本軍を対象とした「組織」の研究

『失敗の本質』（戸部良一ほか著、中央公論新社。以下「本質」という）は太平洋戦争での日本軍を対象とした組織論の学者による分析だ。今、多くの読者はそこからポスト高度成長期における日本の経営への教訓を読みだそうとしている。読んだことのない読者のために、為念だが、「本質」は戦争を正当化しようとか旧帝国日本軍を賛美しようとするものではない。「本質」は六つの主要な敗戦をテーマに、帝国日本軍という当時の最高の組織の中に共通してみられる「失敗の本質」を分析しようと試みている。

他方、本連載は法律意見書の構造について個別の論点ごとに説明してきた。小稿は個別の論点から離れ、「本質」による組織論の成果を応用し、会社という組織の中で法務部や法務部員はどうあるべきか、「本質」が指摘する日本の組織の課題に対して法律意見書（本稿ではCLOに限定せずLegal DDリポートを含む広義）をどのように活用できるか、の考察を試みるものである。もっとも、「本質」が分析した六つの作戦すべてに言及する余裕はないので、海戦のターニングポイントとなった「ミッドウエー海戦」を中心に、適宜その他の作戦に言及しながら構成していくことにする。

読者便宜のため簡単に要約すると、「ミッドウエー海戦」とはハワイの真珠湾奇襲に成功した帝国海軍が空母4隻を扼して翌1942年（昭和17年）6月5日に太平洋の中間地点の米軍の要地ミッドウエー島を攻撃し、近海で米海軍と激突、最終的に全空母を喪失して米側に「戦果絶大なるもの」をもたら

❖資料19 「失敗の本質」



戸部良一ほか著『失敗の本質』

した戦いである。戦いだけではなく、開戦から終戦まで、日本側空母4隻、艦隊司令長官は使用できる。でも、その練度においても、その敗因が、給線の劣勢」ではない。そのため、検証価値が

なお筆者の能力の限りにあらず、検証することができない。したがって、特実と評価を前提とし

聞くが」

シロー少尉が大声で叫

した。日本現地時間 9

ボムが落とされたそう

す」

落ちたと言った!？」

のか!？」

「組織」の研究

以下「本質」という)は

よる分析だ。今、多くの

営への教訓を読みだそう

のだが、「本質」は戦争を

るものではない。「本質」

当時の最高の組織の中に

みている。

の論点ごとに説明してき

織論の成果を応用し、会

べきか、「本質」が指摘す

はCLOに限定せずLegal

か、の考察を試みるもの

すべてに言及する余裕は

ッドウエー海戦」を中心

ことにする。

ー海戦」とはハワイの真

1942年(昭和17年)6月

島を攻撃し、近海で米海

絶大なるもの」をもたら

❖資料19 「失敗の本質」が分析する六つの戦場(太平洋戦争時)❖



戸部良一ほか著『失敗の本質』(中央公論新社)を基に作成。

した戦いである。戦史上「空母 vs. 空母」の特筆すべき海戦とされているだけでなく、開戦からまだ約半年、米側の軍備・生産が整っていなかったため、日本側空母4隻、戦艦2隻に対し米側同3隻、戦艦0隻で「ニミッツ司令長官は使用できる兵力のほとんどすべてを集中したが、兵力絶対量においても、その練度においても劣勢は否めなかった」(「本質」80頁)という状況であり、その敗因が太平洋戦争後半の戦闘でしばしば指摘される「軍備や補給線の劣勢」ではなく、帝国海軍の組織的な「失敗の本質」が浮き彫りになるため、検証価値が高い。

なお筆者の能力の限界により、太平洋戦争の事実関係の正確性を独自に検証することができない。文献によっても事実認定や評価に微妙な差異がある。したがって、特に断りのない限り、本稿では「本質」が認定している事実と評価を前提として論を進めることとする(その他、池田清編・太平洋戦

線とシンクロさせる必要がある。また、この点で、外国人や様々なバックグラウンドを持つ者の登用は異文化からの異なる視点による法務部の柔軟性維持に資するだろう。

なお法務部員を前線に置くことが適用される法律（業法）上難しい組織もある。一つは法務部の位置付けを主としてブレーキとして考える発想の組織である（典型例は邦銀の法務部であろうか）。字数の制約があるので具体的な対策には触れないが、前線に出ていかない（いけない）法務は上記の諸論点に対して別途方策を打つ必要がある。

1946年4月12日付、東京からの手紙

愛するケイトおばあ様へ：

降伏文書調印式が行われた戦艦ミズーリの甲板上で、私は、ペリー提督が幕府に開国を迫った時に掲げていた星条旗の前で連合軍最高司令官マッカーサー元帥が「今日、大砲は沈黙している…全世界は全く穏やかな平和に包まれた」と演説するのを感じ動をもって聞いていました。日本本土決戦は避けられ、元帥はソ連の北海道・東北の日本占領参加に断固反対し、あれから半年ほどが経ちました。今、元帥のもとでトーチカのGHQに勤務しています。窓の外にはインペリアル・パレスの広大な景色が望めます。日本人は長く長く続いた戦争から解放され、昨日までの価値観は逆転しました。一昨日、日本の女性は初めて参政権行使し、婦人代議士が39名誕生しました。元帥は二度と軍国主義に陥らない新生日本の担い手として女性の政治への進出に大いなる期待を抱いているのです。「青い目の大君」となった元帥のもとには日に何百通ものファンレターが来て山のようになっています。またGHQ本部前では元帥を一目見ようといつも黒山の人だかりです。占領政策は順調で、ベテランを中心に帰国したため、占領軍も昨年の半分の約20万人になりました。

現在、戦時中の戦争指導者の意思決定プロセスについて調査をしていますが、先日たまたま複数の若い元下級兵士たちと話をする機会がありました。ガダルカナルの激戦では我が方から雨のように浴びせかけた銃砲撃をもとめず僚兵の屍を乗り越えて猛烈な突進を行うタムラ大隊に対峙したエドソン大佐が「お前たちになくて敵にあるのはガッツだけだ！」と兵士を叱咤激励した話は有名ですし、戦争末期にはゼロ・ファイターの特攻で我々の僚友も多く犠牲になりましたから、それまでは日

本兵というのは命を
しかしこうして
国を守る素朴な情
私自身も祖国の
その純粋さを利
さらに「生きて
押し付けられて
決しました。嬰
さえて窒息死さ
「玉碎」「全滅
国民に抗（あら
の元高級将校は
たもので、軍は
「恥」の概念は
含めて個別の事
別途多角的に吟
組織の意思決定
の独特の「空気」
戦争指導者の
戦争の終結ブラ
のみによって策
「海軍に恥をか
ガダルカナルで
二つの軍は戦争
ため、1944年7
団に収められ戦
trol/mitigation
くなられないま
れ以前より格段
そもそも戦争
前から認識して
になるからと三
ル・ハーバーを
すまず日本を圧
勢のまま短期に
手があること。
かったのでしょ

や様々なバックグ
法務部の柔軟性維

上難しい組織も
考える発想の組織
あるので具体的な
務は上記の諸論点

京からの手紙

ムは、ペリー提
合軍最高司令
世界は全く穏や
ていました。日
本占領参加に断
のもとでトー
レ・パレスの広
解放され、昨日
めて参政権を行
国主義に陥らな
る期待を抱いて
日に何百通もの
本部前では元帥
順調で、ペテラ
人になりました。
て調査をしてい
する機会があり
谷びせかけた銃
行うタムラ大隊
のはガッツだけ
にはゼロ・ファ
、それまでは日

本兵というのは命を顧みない鬼神か狂人かというイメージがありました。しかしこうして話をしてみれば、彼ら自身は家族を、友人を、そして祖国を守る素朴な使命感をもって犠牲になっていったことを理解しました。私自身も祖国のために戦ったので彼らの純粋さに共感できます。しかしその純粋さを利用した帝国政府や軍部がいたことも忘れてはなりません。さらに「生きて虜囚の辱めを受けず」という軍隊の論理が民間人にまで押し付けられていました。沖縄や太平洋の島々では民間人が多数集団自決しました。嬰兒の泣き声を制せられて、母親が自ら嬰兒の口と鼻を押さえて窒息死させたという悲劇もありました。政府、軍部は集団自決を「玉碎」「全滅」のダブルスピークと呼び、新聞はこれを賛美して、国民に抗（あらが）い難い空気を醸成しました。もっとも、ある日本人の元高級将校は私の質問に対して、「民間人の集団自決は自発的に行われたもので、軍は強制した覚えはない。日本人の血が流れていないお前に「恥」の概念は理解できないだろう」と反論します。捕虜虐待の問題も含めて個別の事例で軍の命令があったのかなかったのかは別のチームが別途多角的に吟味することになっていますが、私の課題である日本軍の組織的意思決定プロセスには、曖昧な中で組織的意思決定がなされるあの独特の「空気」とか「察し」がしばしば顔を出すのです。

戦争指導者の尋問は続き、また資料も分析中ですが、帝国政府はこの戦争の終結プラン、いわばexit plan（出口戦略）を、自己の主観的事情のみによって策定していたとしか思えません。「陸軍の顔を立てる」とか「海軍に恥をかかせるのか」と内向きの都合が作戦を決定し、実際、ガダルカナルでは陸軍と海軍はバラバラの状態で見え、戦っていましたが、二つの軍は戦争終末観も違っていました。統合された終結プランがないため、1944年7月のサイパン陥落によって既に日本全土がB-29の爆撃範囲に収められ戦局はもはや動かし難い状況になっても、damage control/mitigation（損害の低減化対策）に関して合理的な検討や判断が全くなされないままズルズルと事態は進み、敗戦前の1年間の死傷者はそれ以前より格段に多くなりました。

そもそも戦争に勝つ見込みがなかったことは彼ら戦争指導者達が開戦前から認識していたことです（注：「本質」278頁）。アメリカとの戦争になるからと三国同盟に断固反対だったアドミラル・ヤマモトがパーネル・ハーバーを奇襲したのは、長期戦になれば物量に富むアメリカはますます日本を圧倒するだろう、だから緒戦で我が艦隊を叩き、有利な情勢のまま短期に講和に持っていかうとしたとされます。しかし戦争は相手があること。なぜ政府や軍部は長期戦になる場合を想定して吟味しなかったのでしょうか。講和の見通しにも合理性があったのかは疑問があり

ます。日露戦争の際には大英帝国との同盟があり、ロシアの権益拡大を懸念していたセオドア・ルーズベルト大統領の仲介も期待できました。ロシアに迫害されていたユダヤ人の協力で帝国政府の戦費調達、国債消化もできました。各国の利害を冷静に観察し、国力の脆弱を補う多面的な外交が展開されていました。しかし今回は国際連盟を脱退して世界中から孤立し、降伏間近には中立条約を締結していたとはいえあのスターリンに、南進主義を伝統とし満州で対峙するそのソ連に仲介を求めたのです。そのソ連に対してヒトラーは日本の了解なく不可侵条約を破って攻め入り、政府はただただ驚くだけでした。他方、アメリカは日本の中国侵略には反対し経済封鎖をしましたが、満州での日本の権益を全面否定していたわけではなく、実際、満鉄の共同経営すら提案していた。日露戦争後、武力を過信し精神主義に陥った日本の判断力・外交力は大きくその質を落としていました…。



アナリシスその3：ダメージ・コントロールや コンティンジェンシー・プランの欠如

ミッドウエーでは連合艦隊は全くいいところがなかったのか、と思う読者もいるだろうが、実は空母「ヨークタウン」攻撃に成功し「ヨークタウン」はかなりの損害を被っている。ところがここで「本質」が指摘する組織上の次の問題が彼我の差として現れる。「ダメージ・コントロール」の問題だ。ヨークタウンは突発的な事態に対応できる訓練ができていた。「ヨークタウン」は「飛竜」艦載機から第一次攻撃で三弾を被弾し大火災になったにもかかわらず、約2時間足らずで消火活動と応急修理に成功して自力航行を開始し、これが日本側に別の空母だと誤認させる米側に有利な効果をもたらした（「本質」93頁）。また「インパール作戦」など他の作戦でもしばしば指摘されるところだが日本軍は「士気が落ちる」などと言ってことのほか「コンティンジェンシー・プラン」（状況変化に対する柔軟な対応、堅実性確保）検討を忌み嫌ったようである。幾度かの失敗にもかかわらず学習せず、強い先入観から敵戦力の過小評価を変えなかった（「本質」176頁）。

契約交渉や合併事業も相手のあることだからこちらの思うようにはいかないことが多い、否、たいがい上手くいかない。だから深手を負わないように事前に複数のシナリオを検討することが重要で、「組織」の価値はそこにあ

るはずだ。法
ろう。



ア

これに関連
が「投資（案
が、具体的
題はマネジ
る。まず①
的には合併
弁契約に設
（案件取組）
業から撤退
に投資決断
様々な問題
く、これの
damage con
三木谷社長
のケースは
なくさらに
経営陣の一
稿が想定す
るが、諸先
また①と②
なる分野に
み込まれて
ちなみに
ワークしな
の装備の間

できるだけ外部弁護士の意見書に喰らいついて、頑張って内容の精緻化を図るしかないし、その作業は万が一株主代表訴訟を被る場合でもムダにはならないと思う（マネジメントが「意見書をもらったからもう安心」と誤解するのにも困るけれど）。

1946年11月3日付、長崎からの手紙

アトミック・ボムのこと：ナガサキの旧グラバー邸でこの手紙を書いています。この邸宅は丘の上に立ち港を見下ろす素晴らしい景観を持っていて、今は連合国軍司令官宿舎となっています。ナガサキではヒロシマに続いてアトミック・ボムの調査をしていて、私は司令官の厚意でしばらくこちらに滞在中です。幸いここは爆心地からは少し離れていて被害を免れました。（中略）通訳のジロー・ヤマムラは父親がヒロシマ出身の日系二世で、ホノルルから随行してくれています。父祖の国と戦うことに悩んだようです。もちろん彼は自分を育ててくれた星条旗のために、そしてアメリカ国内でスパイのように見られているジャパニーズ・アメリカンの名誉のために、ドイツ戦線で片腕を失うほど勇敢に戦いました。しかしヒロシマにアトミック・ボムが落ちた日、爆心地がちょうど親戚の家の辺りにあることを知って泣いていました。幼馴染がいたのです。（中略）一般市民が多数暮らしている町を標的としたこのアトミック・ボムには問答無用の破壊力があります。B-29から投下した「ファットマン」は（摂氏）5千度とも1万度とも言われる巨大な火球を生み出し、そこから発せられた約3千度の熱線は人々の体を貫き、地上にもたらした数10万気圧の大爆風は爆心地に近い浦上地区にあった立派な教会を吹き飛ばし、さらに大規模な火災を引き起こして全焼壊家屋約1万3千戸、半焼壊家屋約5千5百戸にも及び、ナガサキを一面がれきの野原と化しました。一発の爆弾によって、5万とも10万人超ともいわれる多くの人が、皮膚がただれ落ち水を求めながら死んだのです。この世の地獄としか思えません。（中略）マッカーサー元帥はアトミック・ボムには否定的だったとも伝え聞きますが、次の大統領選でライバルになるトルーマン大統領が占領統治責任者に決まっていた自分に断りなく投下を決定したので文句を言っているのかもしれませんが。ただあの人は根っからの軍人なので私の感覚に近いのかもしれませんが。私はおじい様以来の海軍軍人で艦隊同士の戦いには慣れています。こういった一般市民を標的にする軍事行動のバランスがとれているのか、これが現代の戦争というものなのか、それがフェアなのかと疑問を持つのです。（中略）また、通

常の爆弾とは異質の現象が気にかかります。ヒロシマでは直後に「黒い雨」が降った地域がありました。爆発の後にヒロシマに救助に入った兵士などの中に、しばらくして毛がごっそり抜けたり、歯茎から出血した、あるいは下血した、といった被爆者と酷似の症状が見られます。この現象は謎です。アトミック・ボムには身体の外側のみならず体内への影響があるのか？ 私は研究班ABCC (Atomic Bomb Casualty Commission: 原爆傷害調査委員会) の幹部に体内環境への影響についても調査をすべきだ、と進言したのですが、衛生状態が悪いための腸チフスだろうなどと言われて無視されています。今後大きな問題になるのではないかと心配しています。

蝶々さんの消息：(中略) …おばあ様は万が一にも私の戦意に影響するのではないかと心配して話すことを長くためらっていたと、言いました。確かに、ようやく傷が癒えホノルルに向かうためにサンフランシスコを立つ直前に教えてくれたことには驚き、戸惑いを私に与えました。おじい様、フランクリン・ベンジャミン・ピンカートンが海軍士官として第一次大戦前にこのナガサキに立ち寄った時、日本の女性「蝶々さん」との間に一夜だけの関係を持ったこと、帰国しておばあ様と結婚した直後にシャープレス領事から「君の子供が生まれた」と連絡があってビックリしたこと、責任感の強いおじい様はまだ若い蝶々さんの前途を慮って、蝶々さんやその親戚たちと話し合っただけでアメリカに引き取って育てることを決心したこと、おばあ様も大分ショックを受けたけれどそれでもパパを大事に育てたこと、この話が何故かイタリアのオペラになってあまりにも有名になったせいで海軍がおじい様を「合衆国士官にあるまじきスキャンダル」などと誤解して閑職に押し込めたこと、それでもおじい様は第一次大戦でドイツ軍の攻撃で沈没した客船のたくさんの人たちを救って名誉を回復したけれどその際に戦死したこと…。パパとママは「あの事故」で私が小さいころに死んでこれまでそんなことは全く聞いていなかったのですべてが驚きでした。ジローはとても親切な青年で、調査に多忙な中、私のために「蝶々さん」の消息を聞き回ってくれました。ジローは地元の古老を見つけてこんな話を聞いたそうです：

その方なら「マダム・バタフライ」のお蝶様では？ その方は私の知る限り少なくとも真珠湾攻撃の後もしばらくお店を開いていました。お蝶様は地元ではよく知られていました。お蝶様はもともとはお武家の出でしたが明治維新の際に家が落ちぶれて芸者になり、かなり若い頃にアメリカの兵隊さんと恋仲になったと言う人もいますが、詳細は分かりま

せん。結婚
に入れ込ん
様は山の手
ました。彼
店は地元の
盛ぶりです
のです。日
元帥もトル
しゃったこ
じゃなかつ
『美談』に
といういわ
いました。
様が蝶紋様
ただ米国
アメリカに
張っていて
わらせるべ
べで「みんな
この非国民
ことです。
て解放して
アメリカのス
なり、もち
やむを得ず
マドリ御殿
型爆弾の新
わりになっ
指揮してら
えなかつた

(中略) …
す」との
意志を持
女の血が
だ、蝶々
全く分か

では直後に「黒い」に救助で入った兵士から出血した、とされます。この現れは体内への影響をCasualty Commissionについても調査するのではな

私の戦意に影響する、と言います。それにサンフランシスコに与えました。私が海軍士官としての女性「蝶々さん」とあはれと結婚した直後連絡がなくてビツさんの前途を慮り、アメリカに引き取って貰うことを受け入れたけれど、そなたのオペラに出演を「合衆国士官に」求めたこと、それと客船のたくさんした事…。パパまでそんなことは一はとても親切な消息を聞き回って話を聞いたそうで

その方は私の知りませんでした。お母様とお武家の出で、かなり若い頃にアメリカ、詳細は分かりま

せん。結婚はしなかったのですが、土地の名士のヤマドリ公爵がお蝶様に入れ込んで、パトロンとして陰に陽に支援していました。それでお蝶様は山の手の異人館に「マダム・バタフライ」という高級クラブを開きました。彼女は聡明で大変な美人だったので「洋装のマダム」としてお店は地元の名士や外国からの寄港船の上級将校の出入りもあり大変な繁盛ぶりでした。彼女は英語が堪能でしたから外国人の出入りも多かったのです。日本の海軍士官も多く出入りしていて、日本海海戦の英雄東郷元帥もトルコ直輸入の「トーゴー・ビール」を飲みにながらわらわらしゃったことがあるという噂です。ときどき「蝶々さんは自害したんじゃないかったの？」とオペラとの関係を聞くお客もいましたが、「変な『美談』にされてしまって…。過度の精神主義、日本人なら美しく散る、といういわゆるステレオ・タイプの思い込みですわねえ」などと笑っていました。地元ではグラバー（倉場）様ともお付き合いがあり、先の奥様が蝶紋様の着物をよく着ていたのでお蝶様とよく混同されていました。

ただ米国との関係が悪くなる頃、お蝶様は国際通でしたから「大国のアメリカには勝てませぬ。お国はアメリカと戦ってはなりません」と主張していて、開戦後戦局が悪くなると、お蝶様が米国との戦争は早く終わらせるべきだと言っていると聞きつけた特高の手入れがあって、取調べで「みんながお国のために、と言って協力しているのに貴様はなんだ、この非国民め！」などと酷いことを言われ、したたかに殴られたということです。その時は急を聞きつけたヤマドリ公爵が特高の上司と交渉して解放してもらったとのことですが、お店に戻ると、「非国民の店」「アメリカのスパイ！」などと張り紙が貼られていて、お客も寄り付かなくなり、もちろん外国の船も来なくなってしまったので、それでお蝶様はやむを得ず「マダム・バタフライ」をたたんで故郷の大村町にある「ヤマドリ御殿」に引っ込んでしまいました。大村町は山の向こうなので新型爆弾の被害は直接受けていませんが、大勢の傷病者を収容する病院代わりになってかなり混乱していたということは聞きました。女中たちを指揮してテキパキと看護させていたお蝶様は、どうみても40代にしか見えなかったそうですよ。

（中略）ケイトおばあ様、ジローを通じて蝶々さんは私に「お会いします」との手紙をくれました。明日、私はこの邸宅で、この国の中で強い意志を持って生きてきたもう一人の「おばあ様」と会います。そんな彼女の血が自分にも流れていることに戸惑いと誇りとを感じています。ただ、蝶々さんがアメリカ軍人となった孫を歓迎してくれるのかどうかは全く分かりません…（中略）今日、この丘から見る空の広さ、そして海

の青さのなんと美しいことでしょう。真っ白なエイブラハム・リンカーン号に乗ってほるぼるこのナガサキまで航海した若かりし頃のフランクも、きっとこの景色を讃嘆したに違いありません。

では来年春にはNYで再会できることを楽しみにしています。

John. N. Pinkerton

14・完

エピソード:



夏休みの

あの頃の子もた
だ。スタンプを押し
その後の「ダルマさ
での、いつまで経
んたちの写真がこっ
りに行く)、欲張っ
ら！」という時に
だとばかりに嫌が
オクワガタ」、土間
が最後だとばかり
た!)にこっそり
んだ人たちの大き
めに順番にやった
チの一人が決して
わるのだ。

「もう感想文、ヤ
んなよな！」

それを聞いた子
もう残り1週間も
から課せられた「